

令和元年6月17日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02959

研究課題名(和文) 1960年代米英ニューレフトの環大西洋的交流とその影響に関する歴史研究

研究課題名(英文) A Historical Study on the Trans-Atlantic Activism of the New Left in the US and UK

研究代表者

梅崎 透 (Umezaki, Toru)

フェリス女学院大学・文学部・教授

研究者番号：30401219

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アメリカ合衆国において1960年代に展開した社会・文化運動が、いかに他国の運動と連動したのか、そして、越境した運動がどのように米国社会に環流したのかを考察したものである。特にイギリスとの関係において、米国のニューレフト運動、黒人解放運動、ベトナム反戦運動、そして対抗文化は、人的、知的に交流し、互いに刺激し合いながら発展した。しかし、国境を越えた運動は、必ずしもナショナルな文脈に規定される本国の運動を再定義するにはいたらなかった。本研究は環大西洋の交流史をみることで、「1968年」のグローバル性とローカル性という、共存しつつも相反する関係を実証的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、アメリカ合衆国の歴史研究という立場から、次のような意義をもつ。第一に、国内外の研究史を整理し、あらたな視点から「1960年代」を考察する視座を提示した。第二に、米国や英国の大学図書館、コミュニティ・アーカイブスでの史料調査によって、またマイクロ資料の購入によって、貴重な一次史料を発掘し、整理した。第三に、本研究のための国際的な研究者のネットワークを作り、情報交換などを通して研究の進捗に貢献した。第四に、分析を通じてナショナルな歴史学をのりこえ、世界史的視座から60年代を分析する方法を提示した。以上を通して、社会において「記憶」として語られる現代史の側面を歴史化することに貢献した。

研究成果の概要(英文)：This study project analyzed how the social and cultural movements of the 1960s in the United States resonated with the counterparts in other countries and how such transnational movements influenced US society. The New Left movements, the black Liberation movements, the anti-Vietnam War movements, and the countercultures of the United States and the United Kingdom had intellectual and personal exchanges, which affected their courses of development. Nevertheless, such internationally formed movements did not necessarily redefine the nationally confined American social movements of the sixties. By exploring the development of trans-Atlantic exchanges, this study clarified the contradictory nature of the transnational 1968 that had both global and local aspects.

研究分野：アメリカ史

キーワード：イギリス史 ニューレフト 1960年代 1968 ベトナム反戦運動 黒人解放運動 対抗文化 知識人史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「1960年代」をめぐる歴史理解は、各国の現在の政治的状況に強く制約を受ける。米国においては、オバマ大統領の登場が「長い60年代」の成果であると評価される一方で、保守派は現代社会における「伝統的アメリカ的価値観」の混乱の原因をこの時代にみた。そうしたなか、かつての運動世代は初期ニューレフトが担った1960年代前半の非暴力的で理想主義的な運動と、後半以降の急進的で暴力を伴う運動とを対置し、前者を「良い60年代」、後者を「悪い60年代」と峻別して、アメリカ史における「60年代」前半の真正さを主張してきた。そこでは、国境を越えた共時的な運動の高まりや、外国の思想の影響はナショナルな政治的伝統からの逸脱をもたらした負の側面として語られてきた。

しかしながら、米国の若い知識人や活動家は、運動初期からイギリスのニューレフトやフランスの実存主義を意識し、受容していた。さらには、フランツ・ファノンのポスト・コロニアリズムや第三世界の解放運動、毛沢東主義などをあわせて取り込むことで「1960年代」は発展した。特に英国との関係においては、国際戦争犯罪法廷の活動や、アカデミズムにおける協同的發展もこの時代の特質である。近年になって、各国の1960年代の社会運動に、人的、思想的、戦術的連関があったことを示す研究が出始めたが、運動の国際性を再評価する試みは、いまだ萌芽段階にある。

2. 研究の目的

こうした学問状況をふまえ、本研究は、アメリカ合衆国において1960年代に展開した社会・文化運動はいかに他国の運動と呼応・連動し、その国境を越えた活動はどう米国社会に還流したのかを問う。とくに米国のニューレフトや黒人解放運動が、思想、文化、社会運動の面で英国その他の新左翼と連携しつつ相互に影響を与え合った点に着目し、60年代ラディカリズムの越境性を指摘するとともに、それが翻って米国にどのように受け入れられたのか／られなかったのかを歴史学的に検証するものである。

その学術的特徴は、第一に米国の「1960年代」を世界史に位置づける点にある。第二に、人種、エスニシティ、ジェンダーの境界に沿って分断されがちな運動史研究を実証的に統合する点にある。第三の特色として、現代のグローバリゼーションの起点としての1960年代に、国家のあり方をめぐる議論が変化しつつあった点を見出す。これらに加えて、第四に、本研究が米国を中心とした60年代ラディカリズムの一次史料を特定することで、さらなる研究基盤の整備が可能となる。以上より、「1960年代」からアメリカ史を世界史にひらくことで、今後の国際的な研究ネットワークの構築と、国境を越えた歴史学の研究方法を確立する。

3. 研究の方法

上記の目的のために、本研究は、つぎの5段階をもって歴史学的に分析する。(1)米国の政治的伝統と1960年代のラディカリズムの新しさと継続性はどのように評価できるか、(2)1960年代の米英(欧)の知識人ネットワークはいかにして形成可能だったのか、(3)国境を越えた対抗運動としての国際戦争犯罪法廷はどのように準備され、実施されたのか、(4)米国政府、社会は「外国」を経由した知識人、民衆の運動にどう反応したのか、(5)60年代の国際主義は長期的にアメリカ社会にどのような影響を与えたか。最終段階ではこれらを統合し、米国1960年代の世界史的な位置づけを提示する。史料の収集にあたっては、国内外の研究者と情報交換しながら、現地の大学図書館やコミュニティ・アーカイブスを活用する。

4. 研究成果

4年間の研究期間において、本プロジェクトは当初の計画に沿って進められ、資料調査、実証研究、およびその発表を通じた議論を通じて、研究目的を達成することができた。

(1)米国の1960年代のラディカリズムの新しさと継続性においては、編著書『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」 世界が揺れた転換点』(書籍)を出版し、研究史を整理した上で、アメリカの「1960年代」として括られる一連の社会・文化運動を概観し、あわせてその基底にある冷戦とベトナム戦争の余波を考慮に入れて考察した。論文『『内なる反知性主義』—1968年コロンビア大学ストライキと知識人』(論文)と共著『少しでも「政治」を考えよう!』(書籍)では、コロンビア大学とニューヨーク市立大学の学生ストライキから、この問題に切り込んだ。これらでは、ニューレフトだけでなく、黒人解放運動を含む国内の第三世界開放運動、フェミニズム、さらにはアカデミズムにおける変革とその後の継続性を検討し、「1968年」を歴史的「転換点」としてとらえる意味を検討した。

(2)1960年代の米英(欧)の知識人ネットワークについては、編著書『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」』(書籍)において、ニューレフト形成における英米の知識人の協働を見いだすだけでなく、論文『『1968年』のアメリカ例外主義—大西洋をまたいだベトナム反戦運動』(論文)において、国際的反戦運動の発展の中で、英米の知識人によるネットワーク形成がいかに行われたのかを実証的に解明した。また、論文『新左翼とサルトル/ニューレフトとカミュ 日米の『1960年代』と実存主義』(論文)において、フランス実存主義が

アメリカや日本のニューレフト／新左翼に取り込まれる過程を検証することで、思想の伝播における知識人の役割と、国境を越える思想そのものの変化を明らかにした。

(3) 国境を越えた対抗運動としての国際戦争犯罪法廷については、とくに論文『1968年』のアメリカ例外主義(論文)において詳しく分析した。本論文は、英米で収集した一次史料に基づいた実証研究で、前年のアメリカ学会ワークショップで報告し、そこでの意見交換を経て議論を発展させたものである。論文では、国際戦争犯罪の準備、実施のプロセスだけでなく、そこで形成された国際的なベトナム反戦の言説を分析し、さらにそれがどのようにアメリカ社会に持ち帰られたのかを検証した。また、国境を越える運動として、共著『「ヘイト」の時代のアメリカ史 人種・民族・国籍を考える』(書籍)において、「移動の自由」を掲げて国交のないキューバを訪問した若者の活動を検討した。この運動は、後の国際戦争犯罪法廷につながるもので、アメリカにおける左翼知識人のネットワークが反戦運動へと拡大する様子が明らかになった。

(4) 米国政府、社会が「外国」を経由した知識人、民衆の運動にどう反応したのかについては、論文『1968年』のアメリカ例外主義(論文)および、共著『中国が世界を動かした「1968」』(書籍)において、詳細に検討した。米国のニューレフト主流派は、国際戦争犯罪法廷の論理を、ベトナム側に有利で偏ったものとしてすぐには受け入れなかった。この点は、社会運動がそれぞれのナショナルな制約の中で成立していること、そのナショナリズムという制約が想像以上に頑強なものであることを明らかにした。『中国が世界を動かした「1968」』においては、中国の文化大革命と毛沢東思想がアメリカの1960年代の運動、文化、アカデミズムに与えた影響を考察した。ここにおいても、本国の政治文化的文脈から切り離されたアイコンとしての毛沢東やイデオロギーとしての文革が、アメリカのナショナリズムに根ざした独自の運動に独自の形で取り込まれていく過程を詳細に論じた。

(5) 60年代の国際主義の長期的なアメリカ社会への影響は、本研究に通底するテーマであり、各論文や書籍において議論を展開した。訳出論文「転回するグローバル・ターン」(論文)は、こうした世界史像を語る上での理論的基盤の一つである。そして、とくに『思想』でのドイツの井関正久氏、歴史社会学者の小熊英二氏との鼎談(論文)では、日、米、独の視点から、「1968年」のグローバル性とローカル性を検討した。歴史学がナショナルな制約を乗り越えようとするとき、「1968年」はその世界史的連関を語る重要な素材となり得る。しかし、運動の越境性が強調されすぎると、それぞれの国に独特な歴史的な文脈が削り落とされる危険性がある。本プロジェクトは、アメリカの「1960年代」をいったん世界史にひらいた上で、その学問的なアプローチに付随する問題を解明できたところに、当初予定した以上の成果を上げたと言える。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

梅崎透、『1968年』のアメリカ例外主義—大西洋をまたいだベトナム反戦運動』、『思想』、査読無、1129号、2018、72-84。

井関正久、梅崎透、小熊英二、「鼎談『1968年』再考--日米独の比較から」、『思想』、査読無、1129号、2018、20-45。

梅崎透、『内なる反知性主義』—1968年コロンビア大学ストライキと知識人』、『アメリカ研究』、査読無、52号、2018、87-108。

キャロル・グラック著、梅崎透訳、「転回するグローバル・ターン」、『思想』、査読無、1127号、2018、67-79。

梅崎透、「新左翼とサルトル／ニューレフトとカミュ 日米の『1960年代』と実存主義」、『社会文学』、査読有、45号、2017、211-234。

キャロル・グラック著、梅崎透訳、「奇妙で逸脱的な安丸良夫の天職」、『現代思想』、査読無、臨時増刊号、2016、42-45。

[学会発表](計4件)

梅崎透、「"To Rebel Is Justified"—1968年アメリカの第三世界とマオ」、『国際シンポジウム「東風は西風を圧倒したか--世界史の中の『1968』」』、2018。

Toru Umezaki, "The Anti-War Movement of the Sixties Reconsidered: A Transatlantic Perspective," Japanese Association for American Studies, 2017.

梅崎透、「グローバル・ヒストリーとしての『1968年』」、『冷戦研究会』、2016。

梅崎透、「グローバル・ヒストリーとしての『1968年』」、『日本アメリカ史学会』、2015。

[図書](計5件)

楊海英編、梅崎透、馬場公彦、金野純、劉燕子、西田慎、『中国が世界を動かした「1968」』、藤原書店、2019、319。

島村輝、小ヶ谷千穂、渡辺信二編著、常岡（乗本）せつ子、荒井真、渡辺浪二、梅崎透、矢野久美子、堀由紀子、田丸理砂、井上恵美子、湯浅佳子、『少しだけ「政治」を考えよう！』、松柏社、2018、200。

兼子歩、貴堂嘉之編、坂下史子、石山徳子、土田映子、大森一輝・森川美生、南川文里、南修平、藤永康政、梅崎透、和泉真澄、佐原彩子、『「ヘイト」の時代のアメリカ史 人種・民族・国籍を考える』、彩流社、2017、297。

キャロル・グラック（梅崎透訳）五十嵐暁郎、テツオ・ナジタ、栗原彬、武田宏子、井上雅雄、ハリー・ハルトゥーニアン、笠井昭文、越智敏夫、『思想史としての現代日本』、岩波書店、2016、288。

西田慎、梅崎透編、粟飯原文子、田中昌子、中村督、河野真太郎、福田宏、横山政子、安藤丈将、兼子歩、石山徳子、『グローバル・ヒストリーとしての「1968年」 世界が揺れた転換点』、ミネルヴァ書房、2015、450。

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。